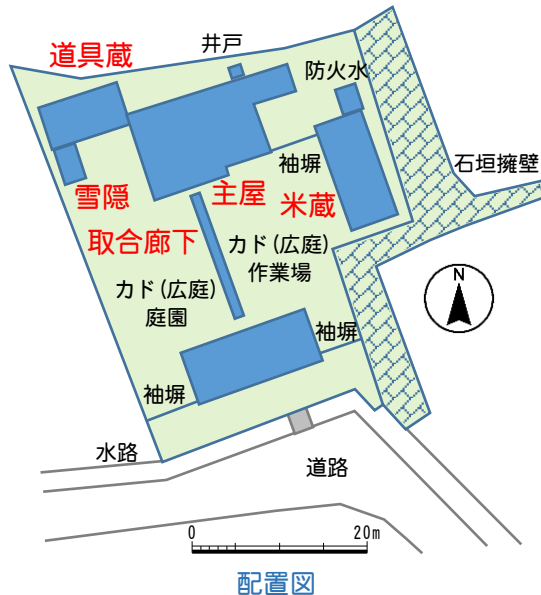


しげたけじゅうたく
重田家住宅
しゅおくほか けん
主屋他5件

明治10年
仲南地区 やまわき 山脇



重田家住宅が建つ山脇は讃岐山脈北麓の標高約140mに位置し、古来より阿波ー讃岐間の交通の要衝でした。金刀比羅宮参詣のための箸蔵街道が通り、昭和20年代までは、春と秋の農繁期に

阿波の牛を讃岐の農家に貸し出す借耕牛の取引の中継地点として栄えました。重田家初代は農業を営み、主屋の東南角隅部が古宅で、明治10年に増築されました。さらに雪隠が大正3年に増築され、現在の屋敷構えとなりました。敷地は、山裾の傾斜地を約50m角の四角形に平坦にされています。東側と北側の小高い丘は丁度屏風を立てたようになり、季節風を防ぐ役目をしています。家は南向きで、主屋に向かって右側に釜屋と湯殿がありました。左側には道具蔵及び雪隠が接続しています。家の前にはカドと呼ばれる広庭があり屋外の作業場となっています。正面は長屋門が建てられた上層の農家の家構えです。国の有形文化財に登録されたのは、主屋、長屋門、道具蔵及び雪隠、米蔵、取合廊下、土塀及び石垣擁壁の6件です。

明治から大正にかけての一般的な農家では梁行2間、桁行5間程度の規模が多い中、重田家主屋は梁行5間、桁行7間で一回り大きい建物でした。周囲に半間(1m)のゲエ(庇)を巡らす四方蓋造



主屋(南西より)

で、この地方で一般的な形式です。主屋根は^{くさぶき}草葺の上に金属板で覆われ、四方蓋は^{かわらぶき}瓦葺です。

長屋門は街頭に面し、主屋の中の間^{なか ま}に対応して大門が開いています。屋根は^{いりも や}入母屋瓦葺、外装腰部は^{こしぶ なまこかべ}海鼠壁、上部^{くろしゅくいぬり}黒漆喰塗です。



長屋門(南より)

道具蔵は主屋の北西角隅に接続しています。切妻・平入り土蔵造平屋建、桁行5間です。屋根は瓦葺、外装は白色金属板で覆い、軒鉢巻きと小さな高窓を備えた、土蔵特有の外観です。雪隠は道具蔵の南西角隅に接続しています。入母屋造、妻入りで屋根は瓦葺、外装は柱を見せる真壁造に漆喰塗です。



道具蔵及び雪隠(南より)

米蔵は切妻造、土蔵造平屋建てで西桁行面に蔵前庇^{くらまえひさし}が差し掛けられています。桁行7間で米蔵・納屋・道具入れの3部屋の構成です。屋根は瓦葺、外装は白色金属板で覆われています。北東端部に^{いずみ さ がんせい ぼう か すいそう}和泉砂岩製の防火水槽が接続しています。前面のカド(広庭)は穀物の乾燥など作業場として用いられました。

取合廊下は主屋と長屋門を繋ぐ廊下



米蔵(南西より)

です。主屋の前のカド(広庭)を東西で二つの用途に区画しています。東広庭は作業場、西広庭は庭園が設けられています。切妻造、妻入り、横半間、^{ちょう}長8間です。農家としては稀な^{まれ}屋敷構えです。



取合廊下(雪隠前、北西より)

土堀は屋敷地を囲むように総延長約100m 築かれています。石垣擁壁^{やますそ}は山裾の傾斜地を平坦に造成した屋敷地の、東辺に残存する斜面の崩落を防ぐために築かれています。土堀下の石垣と擁壁は地元の和泉砂岩が用いられ、谷積み工法で築かれています。和泉砂岩の淡い^{あおねずみいろ}緑鼠色が付近の^{りよくん}緑陰と調和して美しく、明治初期の景観を窺うことができます。



土堀及び石垣擁壁(南西より)

重田家住宅は良好な状態で保たれ、明治初期の各建物の調和した配置が上層農家の佇まいを今に伝えています。